

賀古の駅家（承前）

高松さん、飯沼さんが前2回教信上人について述べられました。今回もその流れを汲んで賀古の駅家へと続きます。

教信上人はなぜ野口に居を定めたのでしょうか。往時、野口から阿弥陀あたりにかけて幾筋かの川が流れていました。いま見る加古川は、河川大改修により加古川町付近の堤防が完成した大正15(1926)年4月以降の姿です。教信上人が微高地になっている野口から西方を眺めたとき、川面にも映える夕陽の美しさ神々しさに西方極楽浄土を見たのかもしれませんが。四天王寺の西門から難波の海に沈みゆく夕陽を見るが如くに。

また、このあたり一帯には仏教を受け入れる素地がありました。教信上人が活躍するより1世紀以前には西条・石守・野口に瓦葺きの寺院が建立されていました。仏教の普及には仏・法・僧が不可欠とされていますが、布教の対象たる在家（貴族や庶民を問わず）の存在がなくては始まりません。寺院を建立・維持するには在家の物心両面のパワーが必要です。早くから渡来文化の流入があり、渡来人の定着がみられた播磨地方では、仏教を受容できる層が比較的厚かったとみていいのではないのでしょうか。

ところで、賀古の駅家をはじめ全国の駅家は、国家の威信をかけ国家の直轄事業として整備されました。道路は直線で幅広に施工された都市計画道路であり、駅家は統治機構の出先機関で、寺院と同様に瓦葺きの建物でした。この道路と機関を利用できるのは、公用の役人であり、外国からの賓客でしたので、在地の住人にとっては、労務の提供以外は無縁の存在でした。とはいえ、そこを通過する人々から間接的な影響を受けたことでしょう。在地の住人は、集落間を有機的に結んだ道路を生活道路として重要視していました。人とモノとの往来がみられ、「荷送り上人」と尊敬された教信上人も歩いた道でした。

さて、教信上人時代の野口の賑わいはどうだったのでしょうか。平安時代の日本の人口を約600万人と想定しますと、現在の約20分の1です。いまから約120年前の明治24年の日本の人口は約4千万人で、野口（加古郡野口村ではなく）の人口は363人でした。単純に比較すると上人が野口で布教していたころ、草庵周辺の人口は100人足らずと思われ、いわば皆が互いに知り合いの仲という感覚であったことでしょう。

賀古の駅家が馬40疋を常備した国内最大の駅家であったにしても、その周辺は小さなムラが散在するだけで、現代的感覚でいうところのマチの賑わいがあったとはとても思えないのです。

賀古の駅家については、後日に稿を改めます。